

作家の肖像

第 15 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1920- 野見山 暁治

のみやま・ぎょうじ

1920年福岡県生まれ。洋画家。東京藝術大学名誉教授。東京美術学校(現 東京藝術大学)卒業。終戦後の52年に渡仏し、58年に「岩上の人」で安井賞受賞。64年に帰国し、68～81年まで東京藝術大学で教鞭を執る。文筆にも優れ、78年に『四百字のデッサン』(河出書房新社)で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。2014年文化勲章受章。

自由で懐の深い人

1970年代後半ごろ、「現代日本美術展」という公募展で、野見山さんとともに選考委員を務めたことがあります。審査員は15人ほどでしたが、選ぶ作品にそれぞれの好みや趣向が表れるのが興味深いものでした。野見山さんの場合、どこか気取っていたり、頭で考えたりしたような絵よりも、素人らしい雰囲気漂う、素朴でのびのびした絵を評価していたように思います。

野見山さん自身も、まさにそんな人柄。ユーモアがあって、自由で、実に懐の深い人です。

絵から伝わる匂い

野見山さんの作品には具象的なものもありますが、70～80年代に描かれたものはその大半が抽象的な作品といえます。不思議なことに、何をモチーフにしているかがわからなかったとしても、野見山さんの絵であるということはすぐにわかる。鑑賞していると、画家・野見山暁治の匂いが、ふっと伝わってきます。でも、それを捕まえようとすると、たちどころに消えてしまう。そんな魅力がありますね。

こんなこともありました。静岡県で開かれた公募展で、審査員を務めた野見山さんと私、それから画家のなかたにやすし中谷泰さんの三人がタクシーに乗り合わせました。お二人の掛け合いはまるで漫才のようで、中谷さんが「君の絵はまるでじゅうたんのようだね」と茶々を入れると、野見山さんは「ふわふわしているからね」などと笑う。

中谷さんは、野見山さんの、時空

の壁を取っ払ったような悠然たる絵を見て「じゅうたん」と評したわけですが、私は「うまいな」と感心しました。野見山さんの絵を前にして、高尚な絵画論を展開したら、なんだか野見山さんに笑われてしまいそうな気がします。そうではなく、「じゅうたん」と表現したあたりに、野見山さんの絵を見ること、あるいは考えることの本当の妙味があるのかもしれない。

意識を超えた“何か”

野見山さんの絵は、心の中で何かを探している人に、「感づくこと」を刺激する絵。ただ、野見山さん自身は、明確な意図やテーマがあって描いているわけではないでしょう。逆説的ですが、ご本人は、何も考えず、ただなんとなく眺めている鑑賞者を好むような気がします。

野見山さんは、身近な自然や風景を五感で感じ取り、浮かんできたイメージを逃さないように描く画家です。目に見えない、手で触れられない、意識や身体感覚を超えた“何か”がわかる人なのでしょう。

例えば、海の色を表すのは青色だけではありません。理屈ではないのです。野見山さんは、そういった感覚に非常にデリケートで、鋭い人。天性のものといってもいいでしょう。そうした自然の本質のようなものを確認するために、野見山さんは長年にわたって描き続けているのではないのでしょうか。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす

世田谷美術館館長、美術評論家。1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。神奈川県立近代美術館館長を経て現職。光村図書中学校『美術』代表著者。



上／「ある日」

キャンヴァス 油彩 130.3×194cm 1982年
練馬区立美術館蔵
福岡県の糸島半島にあるアトリエのバルコニーから、暮れゆく風景を眺めて描いた。



右下／「古びた衣装」

紙 インク・グワッシュ 56.8 × 76.2cm 1974年 練馬区立美術館蔵
古い衣装の塊を精緻に描いたデッサンからイメージを湧かせ、幻想的に仕上げた作品。

左下／「ノルマンディの子供」

キャンヴァス 油彩 72.8×54cm 1955年 神奈川県立近代美術館蔵
パリで描かれた作品。酒井先生が以前勤めていた美術館の所蔵品で、印象に残っている作品の一つ。